

# 体験の風をおこそう

国立夜須高原青少年自然の家次長 樋口 拓

## ESD活動推進拠点としての可能性



第4回

持続可能な開発目標(SDGs)は、この数年間でその17の目標を表すカラーホイールと共に急速に世の中に広まりました。国立青少年教育振興機構は、SDGs達成に向けて、持続可能な開発のための教育(ESD)を推進する立場から、この課題に取り組んでいます。本稿では、筆者が所属する施設での「夜須高原の里地里山『地域文化』」を活かしたESDプログラムを紹介いたします。2020年度は、小学校の新学習指導要領が全面実施されました。今改訂では、その前文と総則に「持続可能な社会の創り手の育成」が明記され、私たちは、このことを指導要領全般にわたる基礎理念であると理解しています。さらに、「よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創る」という理念を学校と社会とが共有し、する必要性も示され、青少年教育施設の側にも、その取り組みが求められていきます。そこで、当機構は、本件への対応力を向上させるため、19年度から、ESD視点を取り入れた「環境教育推進プロジェクトチーム」を設置しました。加えて、カリキュラム・マネジメント(カリマネ)を支援するための冊子を改訂刊行。また、各施設の立地特性を生かした特色化を

図ることで、地域の教育的課題に対応し、体験を通じて、各学校の「社会に開かれた教育課程」に寄与できる体制の構築にも取り組んでいます。

### 多様な自然に囲まれた施設

青少年教育施設は「体験の場」であり「機会」です。体験を通して、児童を「持続可能な社会の担い手」へと成長させる一助となることを期待できます。

国立夜須高原青少年自然の家(福岡県筑前町)には、学校で学ぶ知識を体験に結び付けて、深い理解へと導くための生きた教材にあふれています。針葉樹の造林地、かつて燃料や肥料、資材を産出した雑木林、生活道具を生み出した竹林や草原、田畑と、それらを支える小川やため池があります。人間と自然の営みにより、長い年月にわたって維持形成された2次の自然環境の里地里山が存在し、そこには、多様で貴重な生物が息するとともに、生活の知恵に発する伝統や文化が育まれてきました。

一方、少子高齢化などによって、耕作放棄地の増加や文化継承の危機、森林の荒廃、竹害の拡大

など、里地里山ならではの課題も存在します。このように、里地里山の「美」「醜」両面を併せ持つ地の特徴を生かし、「里地里山」の自然と文化に根差した青少年教育施設」として、体験の場や機会を提供しています。

20年度は、二つの小学校が「夜須高原の里地里山『地域文化』」体験を通じたESDプログラムに参加しました。

一つは、地元の学校です。従来のプログラムをESDという文脈の中で再定義し、林間学校と「総合的な学習の時間」を融合させ、児童が地域の自然を学び、自分たちの暮らしとその循環について、体験を通して学ぶことを試みました。

もう一つは、さまざまなESD活動を展開する海洋教育推進校で、ユネスコスクールです。学校の活動の一つに、SDGsを理解することを目的としたオリジナルカードゲーム作りがあります。しかし、担当教員は、ゲームの中には児童が知らない物やなじみのない言葉も多いので、パソコンや座学で調べただけでは活動との結び付きが軽薄になり、自分ごととして捉えられないことが懸念されました。そこで、SDGsで取り上げられる諸問題につながる事象を実際に見て、感じ、体験し、そして、その解決策の一部をも体験するというプロセスの重要性を考え、当施設の利用につながりました。

本プログラムの主テーマは「森と水」です。児童たちが暮らす町の環境とその生活が、川を介して夜須高原の自然と密接につながっていることを

体験的に学びます。町の暮らしや産業が水に支えられ、その水を蓄え、供給しているのが夜須高原の森であること、里山の森は、人が守り続ける必要があり、その森が生き物たちの多様性を育むことで、私たちは、水をはじめとした森の恩恵を享受できることを理解できるプログラム構成としました(表)。

〈表〉「夜須高原の里地里山『地域文化』」体験を通じたESDプログラム構成

時間	内容
09:30	自然の家入所、入所式
09:45	「里地里山ウォークラリー」
11:30	昼食
12:30	「森の講義」「間伐模擬体験」
14:00	「丸太の皮むき体験」
14:45	「木のストラップづくり」
15:00	「たき火体験」
16:00	「省察活動」、退所式、自然の家退所

### 3種の森で体験

#### ①里地里山ウォークラリー

3種の森(天然林、人工林、竹林)を体験できるコースをグループで巡り、各ポイントで示された「体験の視点」に挑戦しながら、里地里山の自然の特徴と水のつながりを気付かせる活動です。児童たちは、木漏れ日の差す木々を見上げ、葉擦れの音を聞き、しゃがみ込んで土や枝に触れ感

触や香りに感覚を傾けます。こうした体験を通じて、3種の森の違いに触れました。途中、天然林に侵入し、繁茂する竹の勢いに追いやられて枯れる樹木の姿も目の当たりにします。そして、森を抜けると水が湧き出る小川があり、自分たちも森の中で水の旅を追体験してきたこと、この水がやがて自分たちの町に流れ来ることに気付きます。

#### ②森の講義と間伐模擬体験

森の中で、森の働きと間伐の大切さについて話をした後、職員による高さ30mを超える大木の伐倒を見学しました。静かに注目する児童たちの耳には、大木が倒れる直前のミシミシという音が聞こえ、倒れる瞬間には、ドッシンという腹に響く音と衝撃に目を丸くしていました。そして、各グループで5mほどの木の運搬、こずえ切り、枝打ち、玉切り(丸太にする)の活動を体験しました。この作業体験は、樹木の加工工程を理解するとともに、仲間と工夫、協力することの大切さも経験できました。なお、児童たちは、学校で十分な事前学習を行ったことで「木を切ること」の是非について、各自がしっかりと考える機会となったようです。

#### ③「木の皮むき体験」「木のストラップ作り」

運び出した間伐材の丸太が、人の生活に「素材」として役立つまでの工程を体験する活動です。木の皮をむくと、その表面がみずみずしく、ひんやりしていることに驚いている児童もいました。

#### ④「たき火体験」

素材としてだけではなく「燃料」としても、人の生活に役立つことを体験する活動です。森を適切に管理し、育てることで、再生可能なエネルギーとして活用できることを学びます。今日、自分たちが伐採して皮をむいたまきと、乾燥させたまきの、重さ、燃えやすさ、煙の量の違いに驚く場面もありました。

実施校の教員らは、プログラム実施後の児童の意識の変化を語りました。

○このプログラムは、他の教科の学習内容とのつながりを意識できるところが、とても魅力的だと思います。

○国語の授業で、固有種について学ぶ説明文が出てきたのですが、林間学校での体験があったので、とても意欲的に取り組んでくれました。

○自然に対する関心が高まったようです。係活動で行うクイズに、植物や林間学校での経験を話題にする姿が見られました。

○自分たちの町の自然や動植物たちを守らなければならぬという意識が芽生えたようです。登校時に、ごみを拾ってくる児童たちも現れました。

○問題や解決策の一部をも体験し、それらの結び付け方の例(説明内容、方法)を体験するというプロセスは、夜須高原でしか体験できない学習だと思えます。

本稿のESDの展開事例は「総合的な学習の時間」との連携が主でしたが、教員のコメントにもあるように、青少年教育施設での体験活動は、学校での教科等の学習の知識を体験と結び付け、振り返りによって得た「気付き」が、実感を持った深い理解へとつながることで、意識や行動の変容を促すことも期待できます。国立青少年教育振興機構の各施設では、さまざまな特徴的プログラムを用意しており、ご利用をお待ちしております。なお、今回紹介しましたプログラムの詳細は、国立夜須高原青少年自然の家ホームページで見ることが出来ます。